



日本バレエ界を開いた

小牧正英

小牧正英は、一九四六年（昭和二十一）、日本で初めて「白鳥の湖」を全幕上演したバレエダンサーであり、日本の「天才ダンサー」と呼ぶにふさわしい人物であった。日本におけるバレエの歴史は、小牧正英の活動をなくして語ることはできない。

小牧正英は、一九一一年（明治四十四）九月二十五日、江刺郡岩谷堂町の銭鑄町（現奥州市江刺区銭町）に、父榮松、母みよしの第二子、七人兄弟の長男として生まれた。生家は「菊榮商店」といい、味噌・醤油・酢の製造販売業を営んでいた。

本名は菊池栄一。「小牧正英」は、上海在住期間につけた芸名である。

幼少のころは、岩谷堂にあったメソジスト教会系（プロテスタント派の一つの）幼稚園に入園し、賛美歌に親しんでいた。このころの遊び場は、家の近くにある愛宕神社の境内。気性は、幼いころから負けず嫌いであったという。

一九一八（大正七）、岩谷堂尋常小学校（現・岩谷堂小学校）に入学。このころから、抜群の運動能力を見せ、運動会のかっこは、いつも一等賞をとった。

すばぬけていたのは運動能力だけではない。小学校の絵画コンクールで入賞し、このころから一人で絵を描くことが多くなった。絵画は、その後、一度は画家を志すほどの才能を発揮し、生涯の趣味となった。

十四歳の春、高等科の卒業をひかえていた。だが、長男であるにもかかわらず、家業を継ぐ気は起こらなかった。

一九二八年（昭和三年）、十六歳になって上京し、創立間もない目白商業学校（現・東京）に進学した。学生時代は、子どものころから好きだった絵画の道に憧れを持つ一方で、芸人にも関心を抱いていた。

そんなある日、ロシア舞踊について紹介した本に出会い、この本に感動して画家を志し、パリに行こうと考えた。その思いは日に日に強くなり、ついに実行に移された。一九三四年（昭和九年）大陸の満州に渡り、鉄道でパリに渡ろうとしたが果たせず、ハルピン（中国黒竜江省）に留まった。

だが、ハルピンに留まったおかげでハルピン市音楽バレエ学校を

知ることとなる。この学校はロシア人しか入学が許可されない学校だった。しかし、正英は特例のテストに合格して同校バレエ科に入学が許可された。

このバレエ学校の、卒業記念公演「胡桃割り人形」において、主演フリッツの役でモデルン劇場の初舞台を踏んだ。

一九四〇年(昭和十五年)、巡業で上海に立ち寄っていたロシアンバレエ団(バレエ・ルッス)から招請されて入団。このあと、同バレエ団の全作に出演し、舞台経験を踏んだ。

一九四四年(昭和十九)には「ペトルウシユカ」の主役をライセアム劇場で踊り、その躍動感あふれる踊りと高い技術を絶賛された。

このあと活躍は続き、「シエヘラザード」「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「ジゼル」「エスメラルダ」「ドン・キホーテ」「イワンの馬鹿」・・・など数々の舞台で主要な役柄を踊った。

このように、名作の舞台を次々と踏み、様々な体験をしながらバレエを学んでいるさなかに太平洋戦争が勃発し、世の中全部が混乱に陥った。

正英は、戦後間もなくの一九四六年(昭和二十一年)四月、幾度もの危機を乗り越えて、上海より日本に引き揚げた。

その翌年、東京バレエ団設立に参加。日本で初めて「白鳥の湖」

が帝国劇場で全幕上映された。

正英は、その演出・振り付け・指導のすべてを行い、出演もした。「白鳥の湖」

は二十二日間に亘って公演され、空前の観客動員を記録した。

なお、日本語で表記をする際、ストーリー性を持った踊りによる舞台芸術を「バレエ」としたのも正英である。スポーツのバレエボールとの混同を避け、区別するためであった。

その後、小牧バレエ団を創設し、バレエダンサーの養成に努めながら、古典バレエの名作の数々を日本上演した。その活躍は、日本にバレエの真髄を伝え、普及させる原動力となり、日本バレエ界を短期間で世界水準にまで引き揚げる重要な役割を果たした。

二〇〇六(平成十八)、九月十三日、日本バレエ界の先駆者の舞踊家である正英は、肺炎のため死去した。九十四歳であった。



「白鳥の湖」で王子を演じる
(バレエ・ルッス時代)

*参考文献

『えさしルネッサンス館メモリアル』
『バレエの伝正英』



「白鳥の湖」で王子役を演じる
(バレエ・ルッス時代)



小学校時代の同級生
後列右側が小牧
(目白商業学校時代)



油彩「スーズダリ風景」
第31回一水会展佳作賞
1963年(昭和38)



愛用ハレットと絵